

## 露地野菜生産における先進的農業生産法人の展開と特徴

—（有）新福青果（宮崎県都城市）を事例として—

久保田哲史・大塚寛治・石井孝典・新美 洋・倉知哲朗・田口善勝（九州沖縄農業研究センター）

Tetsufumi Kubota, Kanji Ohtsuka, Takanori Ishii, Hiroshi Niimi, Tetsuro Kurachi and Yoshikatsu Taguchi :  
The Deployment and the Feature of an Advanced Incorporated Farm in Vegetable Production  
— The Case Study of the Shinpuku-Seika —

## 1. 課題

わが国の農業経営の中心を占めてきた家族経営が変化・変質し、水平的・垂直的方向での複合的・多角的事業構造を持つ農業経営や、これまでは想像もされなかったような大規模な経営（事業）規模を持つ農業経営が展開してきており、地域農業の担い手としての位置づけが期待されている。

そこで、本報告では、広大な畑作地帯が広がる南九州の宮崎県都城市において、加工や販売とともに、地域農家への販路提供や技術指導、生産委託等の事業を展開している大規模露地野菜生産法人（有）新福青果を事例に取り上げ、地域農業の担い手としての経営戦略の遂行方策を整理する。

## 2. 方法

戦略とは、「企業や事業の将来のあるべき姿とそこに至るまでの変革のシナリオを描いた設計図」（伊丹・加護野<sup>1)</sup>）である。戦略は企業における環境のマネジメントの基本方針として具体化される。企業を取り巻く環境要因の中で、企業にとっては製品市場が他のすべてに優先する最重要要因となる。そして、製品市場での戦略は、顧客ニーズを満たすための競争相手との差別化の戦略と、差別化を実行する企業の供給体制としてのビジネスシステムの戦略に分けられる。

本報告では、（有）新福青果における農産物生産販売の差別化戦略およびビジネスシステムの戦略を整理する。

## 3. （有）新福青果の概要

（有）新福青果は野菜の生産、加工、流通、販売を行う企業農業経営である。日本有数の大規模企業農業経営であり、資本金3,500万円、従業員52名、直営農場180か所60ha、契約農家数667戸、取引販売先67社、関連会社を含めた総売上は15億5千万円に上る。広大な畑作地帯が広がる南九州の宮崎県都城市にあり、主力商品はゴボウ、サトイモ、ニンジンの青果品および加工品である。

## 4. （有）新福青果における製品市場への対応戦略

1) 顧客ニーズを満たすための競争相手との差別化の戦略

（有）新福青果では、農産物の差別化戦略として、2004年4月から青果物の生産段階におけるトレーサビリティシステムを稼働させている。

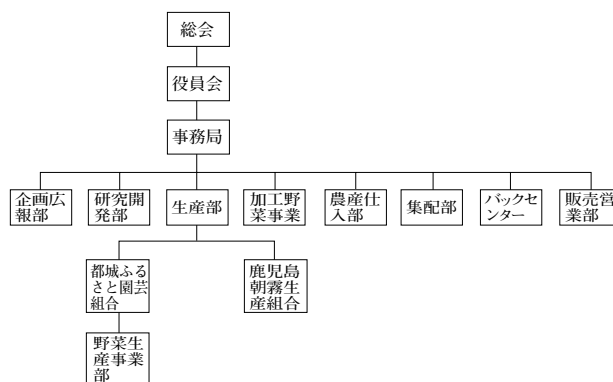
このシステムでは、使用資材とその使用量、作業毎の労働時間と作業数等を圃場毎に入力する。携帯用パソコンを入力端末とすることによって、圃場における各種作業後のタイムリーな入力が可能になっている。入力作業はタッチパネルへのペン入力により効率化されており、入力されたデータは本社サーバーへ転送され蓄積される。蓄積されたデータは本社において圃場ごとに原価計算帳票や圃場作業日報として整理される。

（有）新福青果では、すでに大手量販店との間でトレーサビリティを前提とした取引が開始されている。将

来的にはホームページ等を通じて直接消費者に情報を公開できるように、システムの拡張を計画している。

2) 農産物の供給体制としてのビジネスシステムの戦略

（有）新福青果は、都城市を中心とした1市5町の農家465戸および（有）新福青果で組織する都城ふるさと園芸組合と、鹿児島県志布志町や末吉町、内之浦町等を中心とした202戸の農家で組織する鹿児島朝霧生産組合の2つの生産組合を設立しており（第1図）、販路の提供や技術指導、生産委託等を行っている。



第1図 （有）新福青果組織図

注）（有）新福青果資料および聞き取り調査から作成。

このような、地域農家への販路提供や技術指導といった戦略はビジネスシステムとしての系列化に相当する。

系列化によって、新福青果と地域農家とが互いに利害の共同体になり長期的な協力関係を構築することによって、農産物アイテムの多様化や供給量拡大等の市場からの要望への対応を可能としている。

さらに、トレーサビリティシステムの適応範囲を生産組合の構成農家へ拡大することによって、系列内における生産活動の効率化促進や、系列化による長期的取引関係がもたらす系列内の競争停滞の回避が可能になる。

## 5. おわりに

以上のように、（有）新福青果においては、農産物トレーサビリティシステムの導入により、製品市場に対する農産物の差別化戦略を遂行すると同時に、差別化された農産物を安定的に供給するために、トレーサビリティシステムを活用した系列化というビジネスシステムの戦略を構想している。この2つの戦略は、安全で安心して食べられる農産物の供給という消費者のニーズを満たすと同時に、地域農業にも貢献している。（有）新福青果は今後の法人経営のひとつのプロトタイプと考えられる。

## 引用文献

1) 伊丹敬之・加護野忠男：ゼミナール経営学入門 第3版，日本経済新聞社，2003。